

ひょうごの 赤十字



2016. 6月
June

特集

熊本地震災害の被災者を
全力で支援



平成28年熊本地震災害義援金を受付
救護班からの活動報告
姫路市地区赤十字のつどいを開催
奉仕と博愛の精神を誓う
神戸まつりで赤十字をPR
新メンバーを迎えスタート
ライトアップで考える人道
講習のご案内

熊本地震災害で被災された皆さまに謹んでお見舞を申し上げます。

 日本赤十字社 兵庫県支部
Japanese Red Cross Society

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目4番5号



078-241-9889

電話



赤十字 兵庫

検索



熊本地震災害の被災者を全力で支援

～いのちと健康の守り手として医療救護班を派遣～

4月14日、16日と2度にわたる最大震度7の激震と、いまだに余震が続く熊本地震では、死者68人、全半壊家屋8,181戸(5月16日現在、消防庁調べ)など、熊本県を中心とした各地に甚大な被害をもたらしました。日本赤十字社では負傷者救護や避難者への支援など、被災者のいのちと健康を守る活動に全力で取り組んでいます。

兵庫県支部では、2度目の震度7の地震が発生した4月16日午前9時、神戸赤十字病院からdERU(国内型緊急対応ユニット)チーム11人が、姫路赤十字病院から兵庫DMATチーム(災害派遣医療チーム)5人が第1陣として熊本県の被災地に向け出動し、医療機関や避難所アセスメントなどの活動を行いました。その後も、引き続き救護班を派遣し、避難所に展開した仮設診療所や巡回診療で、被災された方々の診療や健康管理、こころのケアにあたりました。

兵庫県支部救護班の活動状況

派遣期間	活動場所	所属	班員の内訳
4月16日～20日	熊本市北区、益城町総合体育館 熊本市北区	神戸赤十字病院 兵庫県支部 姫路赤十字病院	医師:16人 看護師:39人 薬剤師:9人 主事他:39人 ※こころのケア要員14人を含む
4月19日～23日	ホテルエミナース(益城町)	姫路赤十字病院 神戸赤十字病院 兵庫県支部	
4月22日～26日	ホテルエミナース	姫路赤十字病院 多可赤十字病院 柏原赤十字病院 兵庫県支部	
4月23日～28日	災害医療コーディネーター	神戸赤十字病院	
4月25日～29日	ホテルエミナース、益城町総合体育館	神戸赤十字病院 兵庫県支部	
4月25日～5月1日	こころのケアコーディネーター	神戸赤十字病院	
4月28日～5月2日	村立南阿蘇中学校(南阿蘇村)	姫路赤十字病院 兵庫県支部	
5月1日～5日	村立南阿蘇中学校、村立南阿蘇西小学校	姫路赤十字病院 兵庫県支部	
5月4日～8日	村立南阿蘇中学校、村立南阿蘇西小学校	姫路赤十字病院 多可赤十字病院 柏原赤十字病院 兵庫県支部病院	
5月7日～11日	村立南阿蘇中学校、村立南阿蘇西小学校	神戸赤十字病院 兵庫県支部	
5月10日～14日	村立南阿蘇中学校、村立南阿蘇西小学校	姫路赤十字病院 多可赤十字病院 柏原赤十字病院 兵庫県支部	
5月13日～15日	こころのケアアドバイザー	神戸赤十字病院	
5月15日～21日	こころのケア(職員支援)	姫路赤十字病院	
5月24日～30日	こころのケア(被災者支援)	多可赤十字病院	
5月27日～29日	こころのケアアドバイザー	神戸赤十字病院	
合計			103人



第1陣として熊本に向け出動する救護班



近衛日本赤十字社長の激励を受ける救護班



被災者に寄り添いながら、仮設診療所で診療にあたる医師



被災者の声に耳を傾ける看護師



避難所に入りきれず、車中で避難生活を続けるお年寄りに声をかけるこころのケア要員



エコミークラス症候群や生活不活発病予防のため、健康体操を行う理学療法士



救護班からの活動報告

この度の地震で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
阪神・淡路大震災は私が研修医1年目の時でした。それから8年後、神戸赤十字病院が現在地に開院するに伴い赴任いたしました。上司からは「新しくできるこの病院は、被災地兵庫県神戸市の赤十字病院であり、兵庫県災害医療センターと共に災害救護も頑張らないといけない病院である」と言われたのを思い出します。
東日本大震災からもう5年、まだ5年しか経っていないのに、またしても地震災害が起きてしまいました。あの時もそうだったように、今回の熊本でも「神戸から来ました」とご挨拶すると、多くの方が「あの神戸からよく来てくれました」とお礼を言ってくださいました。改めて(被災地)神戸(ひょうご)の赤十字(病院)という名前の大きさを痛感させられた次第です。20年経った今でも阪神・淡路大震災の被害の大きさが、人々の記憶に残っているのでしょう。
熊本では、本部運営、避難所アセスメント、避難所救護所診療等々、多種多様の業務を行わせていただきました。そういった活動ができたのも過去に被災した経験をもとに研鑽し、さらにはいろいろな方々が努力、協力した結果の賜物であると思います。
このような経験はしたくはありませんが、させていただけることに感謝しています。



神戸赤十字病院
岡本 貴大
医師

適切な支援を行うため、避難所の医療ニーズの把握や衛生状態などの聞き取り調査を行う岡本医師(右から2人目)

5月7日から11日まで、第9班として熊本県南阿蘇で活動させていただきました。ここでは私個人の経歴から、救護活動への思いを紹介したいと思います。
医者になって初めて勤務していた須磨赤十字病院で、研修医2年目の時に阪神・淡路大震災を経験しました。当時、日本の災害医療は情報共有が容易ではなく、担当した19歳の女の子を救えなかった悔しい思いから私の医者人生はスタートしました。
平成23年の東日本大震災の時には、岩手県山田町で活動させていただきました。救護所での診療は円滑で、避難所での感染症対策などもいろいろな情報をもとに行われ、阪神・淡路大震災での反省が生かされていました。
今回の熊本での活動においては、薬剤師会が所有する「車ごと移動できる調剤薬局(モバイルファーマシー)」や看護協会所属の災害支援ナースとの連携など、日赤以外の組織との協力も行われ、救護活動の幅と厚みがさらに増していました。
阪神・淡路大震災から21年経ち、私の医者人生の成長と共に救護活動が大きく進歩したことを実感できました。ただハードウェアはどんどん進歩するその一方で、困ったときに互いに助け合うという気持ちの面は、10年経っても100年経っても変わらないと感じました。1890年の和歌山県沖での海難事故救護活動から始まった日本赤十字社兵庫県支部の救護活動は、「互いに助け合う」という変わらない思いを大切にしながら、私の医者人生と共にさらなる進歩を続けたいと思っています。



神戸赤十字病院
白坂 大輔
医師

熊本出発にあたりテレビ取材に応じる白坂医師

平成28年熊本地震災害義援金を受付

受付期間 / 平成28年6月30日(木)まで
ご協力方法 / 郵便振替(ゆうちょ銀行・郵便局)、銀行振込、コンビニエンスストア端末などによりご協力いただけます。

※お寄せいただいた義援金は、手数料などを一切いただきず、全額を被災された方々へお届けしています。義援金受付に係る事務費などの経費は、皆さまから赤十字へお寄せいただく活動資金により対応しています。

【お問い合わせ先】
日本赤十字社
パートナーシップ推進部
☎ 03-3437-7081



国内災害救護

救護班からの活動報告

今回の熊本地震の救護活動は、本社から日赤災害医療コーディネーターとして要請を受けた岡本医師のサポート役が主業務となりました。主な活動場所は、甚大な被害があった益城町の益城町保健福祉センター内の医療対策本部で、本部が中心となり、医療ニーズが把握出来ず統制が取れていない上益城圏域全体の医療対策本部体制の再構築が1番のミッションでした。状況把握から始まりましたが、岡本医師の隙のない交渉力によって、JMAT(日本医師会災害医療チーム)等の関係組織の協力のもと、活動期間終了の前日に再構築された対策本部組織が動き出し、肩の荷が下りました。改めて、災害時における関係組織との交渉力及び判断力、決断力の重要性を学びました。今後、多種多様な災害に対応するためには、現場で活動する関係者のスキルアップも必要ですが、活動の方向性を決定するコーディネーターの役割はさらに重要になると痛感しました。

阪神・淡路大震災をはじめ、新潟中越地震、中越沖地震、東日本大震災等の救護活動に参加させていただきましたが、活動後にいつも感じることは、自分には動く場所があり、住む場所もあり、家族があり…普通に生活出来ていることへの感謝です。普段の当たり前のことを大切に、有事の時には動けるようアンテナを張っておきたいです。



神戸赤十字病院
安部 雅之
庶務課長

日赤災害医療コーディネーターとして活動する岡本医師をサポートした安部課長(右)

私は、避難所となっている益城町のホテルエミナースに開設された救護所で、救護班第4班の薬剤師として活動を行いました。

我々の主な活動は、病気を有する子どもや高齢者の方々の救護所での診療の他、近隣の診療所や病院と情報連携を行い、最適な受診方法を勧めることでした。また、避難所内の感染症対策やこころのケア活動、エコノミークラス症候群の防止など健康管理を目的とした体操の実施なども行いました。

医療体制や医薬品の供給体制は早期に確立していたので、安定した救護所運営が行えたと考えています。

しかし、受診される患者さんの多くは、風邪や便秘、不眠など、長年に渡る避難生活から来る症状が多く、今後はそのような症状の予防や対策を充実していく必要があると気づかされました。

また、救護所外では車中泊をしている方々も多く、このような方々に対する情報の発信方法を充実させ、避難生活をされている多くの方々に、安定した医療を提供出来るような体制づくりも重要と考えます。



柏原赤十字病院
安田 智之
薬剤師

速やかな救護所運営のため、薬剤師会と情報を共有し連携を確認する安田薬剤師(左から2人目)

4月16日未明、2度目の震度7の地震が熊本地方を襲い、DMAT(災害派遣医療チーム)出動要請が入り、当院からは早速、DMAT隊を熊本に向かって派遣しました。

16日の夜にDMAT参集拠点の熊本赤十字病院に到着し、17~19日に宇土市と熊本市北区で避難所を巡回し情報収集を行いました。その後は、日赤兵庫県支部救護班として当院から6班の救護班が、避難所となっていたホテルエミナース、南阿蘇中学校体育館などで、約1カ月にわたり救護活動を行いました。

今回の救護活動に参加したのは、医師7人、看護師19人、こころのケア要員6人、薬剤師5人、臨床工学士2人、放射線技師2人、臨床検査技師2人、理学療法士1人、臨床心理士1人、事務5人の計50人で、私も当院の第2班の一員として救護にあたりました。また、当院からは病院支援として熊本赤十字病院に22人の看護師も派遣しました。

今回の震災の特徴は震度7の大地震が連続して起こり、その後も震度3~4の余震が毎日のように続いたということで、先の見えない不安と長引く避難所生活のストレスから来る体調不良、エコノミークラス症候群、感染症などの対策が主な活動でした。引き続き「こころのケア」を中心とした長期的な支援が必要になると感じています。



姫路赤十字病院
八井田 豊
医師

避難所に開設された救護所で被災者を診察する八井田医師(中央)

発災から2週間が過ぎた亜急性期に、南阿蘇村立南阿蘇中学校を拠点に救護活動を行いました。

避難者は400人を超え、不慣れな避難所生活、土砂崩れによる家屋倒壊、水源の断絶など、今後の生活への不安からストレスが積み重なってきていることを感じました。保健師との話し合いの中で、一時的な居場所である避難所で住環境を完璧に整えてしまうことは適切ではないことを学びました。

また今回、多職種の組織的活動に驚きました。「以前とは違い、今は行政指揮下でいろいろな団体が活動し、日赤救護班もいわば派遣社員の一員と自覚して活動してほしい」と、初日に熊本県本部で言われた意味が納得できました。避難所には私たちの他、薬剤師会や災害支援ナース、保健師、精神科医、リハビリチーム、歯科医師団、自衛隊、行政関係者、警察、ボランティア等々が全国から集まり、役割分担と連携を密に支援活動を実践しており、私たちも巡回で得た情報を必要な職種と共有・連携し、被災者ニーズにタイムリーに対応することができました。被災地では現場から引き出した情報をいかに共有し連携するかが重要で、救護活動の計画にも生かされることが学べました。最後に、複数の救護班と期間内で能率的な活動をするためには、チーム医療が必須で、施設での日頃のチーム医療の在り様が被災地活動にも繋がっていることを改めて実感することができました。



姫路赤十字病院
芦田 真知子
看護師長

被災地での活動を報告する芦田看護師(右から2人目)